



## 「私の半分はどこから来たのか」 (大野和基著)を読んで

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。  
「公事宿法律事務所」代表。

「アイデンティティ」とは、自分が何者であるのかを認識して他者と区別できる状態のことをいう。おそらく、アイデンティティを形成していくためには父と母が誰であるのかという認識、つまり、遺伝的要素も踏まえた上作り上げていくのだろうと思う。

この点、父につき、私自身に引き直して考えてみた。少なくとも、戸籍などからは、江戸時代の天保年

間には山形県酒田市に高橋家があり、当主はいすれも安左衛門と名乗っていたことは分かつている。また、10年間ほどは一緒に酒田市のお墓参りをするなどしてともに時間を過ごし、亡くなった後の私の日常生活において父の遺影に手を合わせる生活を通じて考えてみると、自らのアイデンティティの基礎には、血縁を遡るという遺伝的要素が欠かせないのかかもしれない。

ところで、父側に無精子症の歴史があることなどから、非配偶者間人工授精(以下、「A-D」という)による出生した子どもには、父親が誰であるのかという視点が欠落している。子を持つ親側からすると、半分でも生物学的につながった子どもがほしいという切実な気持ちがA-Dを利用することによって叶えられるものの、家族によつては、その後に説明のつかない違和感や緊張感を感じながら育つ子どもがいることを否定できない。また、違和感や緊張感などがなかつたとしても、当然のように自分の父だと信じてきた男性について、後日、実は生物学的につながりが全くないという現実を知らされた子どもの中には、自分の生物学的な父が誰であるのかがわからないとい

う重さに押しつぶされ、自分のアイデンティティというジグソーパズルの一部がまったく大きく欠落してしまって、自分のアイデンティティの半分がふわふわ宙に浮いている状態、自分がふわふわ宙に浮いている状態、自分はどこからきたのか、何者なのかという気持ちに打ちひしがれ、その後、仕事や勉学にも集中できず、心療クリニックにて治療を受ける子どもたちもいるとの指摘もある。